

## 第1章 今年度の研究概要について

### 1 ねらい

広島県教育委員会は、平成26年12月にグローバル化する21世紀の社会を生き抜くための新しい教育モデルの構築を目指して「広島版『学びの変革』アクション・プラン」(以下「アクション・プラン」という)を策定した。このアクション・プランにおいては、各取組の方向性については示されているが、取組の具体についてはそれぞれの学校の特色を生かした取組を行うこととし、具体的なカリキュラムや指導方法、評価方法等は、それぞれの学校で議論を行い、各教職員が主体性を持って実情を踏まえた実践を行うことが必要であるとしている。

また、平成25年に中央教育審議会から出された「第2期教育振興基本計画」においては、これからの教育の基本的方向性の一つとして「社会を生き抜く力の養成」が挙げられ、その成果目標の一つとして、「答えのない問題」に自分で解決方法を見出す力として「課題探求能力」の修得が挙げられている。

このようなことを踏まえ、本年度、本校では、昨年度の「授業における中心発問の工夫」の成果を踏まえながら「解答のない課題に対して深く思考し答えを導き出しながら、自分の考えを相手に適切に伝える表現力を身に付けた生徒の育成」をねらいとし、取組を進めることとした。

本校の生徒に身に付けさせたいコンピテンシーは次のとおりである。

- ①自ら思考し、自分の考えを根拠を明確にして相手に適切に伝える表現力
- ②答えのない課題に対して果敢にチャレンジし、課題を乗り越える姿勢
- ③社会の課題を自分のものとして引き受け、主体的に関わろうとする意識

### 2 概要

本年度、本校では、活用コア中核教員と指導教諭を中心にした若手教員からなるプロジェクトチームを新たに結成し、相互授業観察、授業評価アンケート、思考力問題の作成など授業づくりを中心に取組を進めた。これらの取組は、授業準備段階において授業における目標を明確にし、その授業目標を達成するための授業改善・実践から始まり、その授業を受けての生徒がどう感じているかを授業評価アンケートで、授業で身に付けさせたい力を生徒が身に付けているかを思考力問題で検証し、その後さらなる授業改善を行うといったPDCAサイクルに基づいた一貫した取組である。それぞれの取組の概要については次のとおりである。

#### (1) 相互授業観察

本校においては、これまで、当該年に公開研究授業を行う教員の授業を当該教科の他の教員が観察し、研究テーマにそった授業づくりについて意見交換を行うという方法をとってきたが、本年度は、アクティブラーニング型の授業づくりを進める観点から、管理職による授業観察の時期に教員同士の相互授業観察を実施することとした。

実施の方法は次のとおりである。

- ①授業者は3つのポイントを踏まえた簡易指導案を作成し、事前に決められた共有フォルダ内に保存しておく。

3つのポイントについては次のとおりである。

- (1) 身に付けさせたい力の明確化
- (2) 目指すべきコンピテンシーとの関連性
- (3) 身に付ける手立てとしてアクティブラーニングを取り入れる

- ②見学者は共有フォルダ内の当該簡易指導案をプリントアウトして持参し、3つのポイントを中心授業見学を行い、その後に授業観察の記録を作成し、事前に決められた共有フォルダ内に保存しておく。なお、見学にあたっては、専門教科に加えてなるべく他教科の授業を見ることで、指導方法についてより広い視野を持てるようにする。

- ③授業者は、共有フォルダ内に保存された自分の授業に対する授業観察の記録を見て、必要に応じて見学者と意見交換等を行い成果と課題を明らかにするとともに、自分が見学した授業のよい面も参考にしながら、次回からの授業づくりに生かしていく。

授業づくりの取組については、これまでは教科内での取組に終り他教科の取組内容については校内で十分な情報共有ができてこなかったが、教科の枠をこえて相互授業観察を行うことで、授業づくり

について学校全体で取り組んでいくという仕組みを整えることができた。なお、プロジェクトチームのメンバーについては、プロジェクト会議で簡易指導案について、事前の検討を行うことで、新しい授業スタイルを積極的に提案することができた。

## (2) 授業評価アンケート

本校においては、これまで、1学期と3学期の2回、生徒へ無記名方式での授業アンケートを行ってきたが、この方式は変更せず、アンケート項目について見直した。

昨年度の授業評価アンケート項目から、アクティブラーニングを取り入れた授業づくりの評価になるように「授業目標」・「目標を達成する手立てとなる学習活動」・「生徒の学力・学習意欲向上」の3分野を踏まえた項目になるよう変更した。（「授業の目標やまとめが提示されている」から「授業の目標が明確である」、「なぜそうなるのかなどを授業の中で考えさせている」から「この授業では、読む、書く、話し合うなどの学習活動を取り入れている」など）

項目は以下の通りである。

- a 授業の目標が明確である。
- b この授業では、読む、書く、話し合うなどの学習活動を取り入れている。
- c この授業では、ある課題について様々に考える場が設けられている。
- d この授業では、自分以外の人意見を聴き、自分の考えを深めることができる。
- e この授業を受けて、学力や技能の向上を実感している。
- f この授業を受けて、興味・関心が深まり学ぶ意欲が出てきた。

授業目標・・・a

目標を達成する手立てとなる学習活動・・・b・c・d

生徒の学力・学習意欲向上・・・e・f

アンケート項目を3分野の観点に変更することで、アクティブラーニングを取り入れた授業づくりをした結果生徒がどう感じているのかを数値化できるようにした。アンケート結果をプロジェクトメンバーを中心に分析していくと次のようなことが明らかとなった。

質問項目を変更したため、昨年度との単純な比較はできないが、a「授業の目標が明確である」（昨年度は「授業の目標やまとめが提示されている」）については、わずかながら上昇した。また、e「授業を受けて、学力や技能の向上を実感している」とf「授業を受けて、興味・関心が深まり学ぶ意欲が出た」（どちらも昨年度同様の質問項目）については平均の数値に大きな変化はなかった。

次に、アンケートから出てきた数値を用いて各項目の相関関係について分析してみると、次のようなことが明らかになった。（なお、相関係数は-1から1の間で示され、係数が0.5以上であると、相関関係が強いと言える。）各項目の相関係数はすべて0.5を超えており、相関関係が強いと言える。また、「授業目標の明確化」・「学習活動」と「生徒の学力・学習意欲の向上」とではどちらがより強い相関関係にあるのかを調べるため、アンケート項目 a「授業の目標が明確である」・b「読む、書く、話し合うなどの学習活動が取り入れられている」と e「授業を受けて、学力や技能の向上を実感している」・f「授業を受けて、興味・関心が深まり学ぶ意欲が出た」という項目の相関数値に注目すると、「授業目標の明確化」の方が「生徒の学力・学習意欲の向上」に大きな影響を与えるということが分かった。

相関係数	a	b	c	d	e	f	AVE
a	1.00	<b>0.81</b>	<b>0.83</b>	<b>0.89</b>	<b>0.93</b>	<b>0.92</b>	0.95
b	<b>0.81</b>	1.00	0.89	0.79	<b>0.85</b>	<b>0.86</b>	0.92
c	<b>0.83</b>	0.89	1.00	0.83	0.84	0.88	0.92
d	<b>0.89</b>	0.79	0.83	1.00	0.91	0.90	0.93
e	<b>0.93</b>	<b>0.85</b>	0.84	0.91	1.00	0.95	0.97
f	<b>0.92</b>	<b>0.86</b>	0.88	0.90	0.95	1.00	0.97
AVE	0.95	0.92	0.92	0.93	0.97	0.97	1.00

### (3) 思考力問題の作成

本校においては、これまで、定期試験問題は、各教科会において協議等を進めてきたのみであったが、本年度は、全ての試験作成者は「思考力・判断力・表現力」を問う問題を作成し教科会で検討した後、一番良いと思われるものを教科主任会議に提出し、その問題の妥当性について全体で協議することとした。

実施の詳細は次のとおりである。

- ① 2学期以降に実施した全ての定期試験において、定期試験問題のうち、それぞれの教科の中で最も生徒の「思考力・判断力・表現力」を問う問題としてふさわしいものを1題選ぶ。
- ② その際、「思考力・判断力・表現力」で求められる能力として想定した「与えられた規則、定義、条件、知識等を理解し、それらを正確に運用する力」や「事象を一般化する、具体と抽象の次元を結びつける力」、「与えられた情報・資料や自他の思考を、客観的に批判する力」など9項目のどの項目に、その問題が当てはまるかを明らかにする。なお、「思考力・判断力・表現力」で求められる能力の項目については、高大接続システム改革会議（第3回、平成27年6月11日開催）での配布資料やそれをもとに河合塾が作成した新テストで評価すべき能力等のイメージをあらわした表（Guideline 2015. 9）を参考に作成した。
- ③ 教科主任会議で、「思考力・判断力・表現力」を問う問題としての妥当性を、教科の枠をこえて協議し、その意見を各教科会で持ち帰り、次回からの定期試験問題づくりに反映させる。

この結果、これまで「思考力・判断力・表現力」を問う問題として漠然としてそれぞれの教科ごとに取り組んできたことを、その力を構成する要素を明らかにし、学校全体で共有することで、「思考力・判断力・表現力」を問う試験問題について、教科の枠をこえて学校全体で取り組んでいくという仕組みを整えることができた。

## 3 成果と課題

本年度の取組の成果と課題については次のとおりである。

### (1) 相互授業観察

この取組での成果は、教科の枠をこえて授業観察を行うことで他教科の取組内容の共有化、また授業づくりを学校全体で取り組んでいくという意識を広げることができたということである。他教科等の良い取組を自身の授業に取り入れるなど授業改善を進める上で、大きな成果があった。

課題は、第1回相互授業観察後に「アクティブラーニングを取り入れた授業を行ってみた感想」というアンケートを全教員に実施した結果、「アクティブラーニング＝話し合いなのかよくわからない、アクティブラーニングの有用性を感じない」といった疑問や否定的意見が多く挙げられた。この結果から、教員全体のアクティブラーニングに対する認識の共有がまだ十分でないことが分かった。

### (2) 生徒による授業評価アンケート

アンケート結果から「授業目標の明確化」という項目については昨年度よりもやや数値が上がっているが、「学力や技能・学習意欲が向上していると実感できていると感じている」という項目の数値には大きな変化はなかった。ここから大きな課題がみえてきた。それは、生徒が授業目標を理解して授業に参加しているが、授業終了時に本時の授業目標に到達したと感じられていないという状況が明らかとなった。そのため、授業において目標と目標を達成するための学習手立てとのマッチングをより一層考えていく必要があると分かった。

### (3) 思考力問題の作成

この取組での成果は、これまで各教科内での定期試験問題の協議にとどまっていた状態から思考力問題作成の取組を学校全体で共有することができたことである。また、学校全体で「思考力・判断力・表現力」を問う問題作成に取り組んでいくという体制を整えることができたことである。

課題は、思考力問題に対して根拠を明らかにして解答できない生徒が多いということが各教科の共通課題として浮かびあがり、本校のコンピテンシーの1つである「自ら思考し、自分の考えを根拠を明確にして相手に適切に伝える表現力」の育成につながる授業づくりがまだまだ十分にできていないということが明らかになったことである。

#### 4 授業づくりに関する取組をととして

本校の生徒に身に付けさせたい3つのコンピテンシーをどう生徒に身に付けさせるかに対して、本年度は授業づくりの柱として①相互授業観察、②授業評価アンケート、③思考力問題の作成の3つを中心に取り組んだ。

成果として、

- ①教職員全体の授業づくりに対する意識の向上
- ②教科の枠組みを超えた授業・思考力問題づくりの校内体制の整備
- ③授業づくりにおける目標と手立てのマッチングの重要性の確認

などが挙げられる。

課題として、

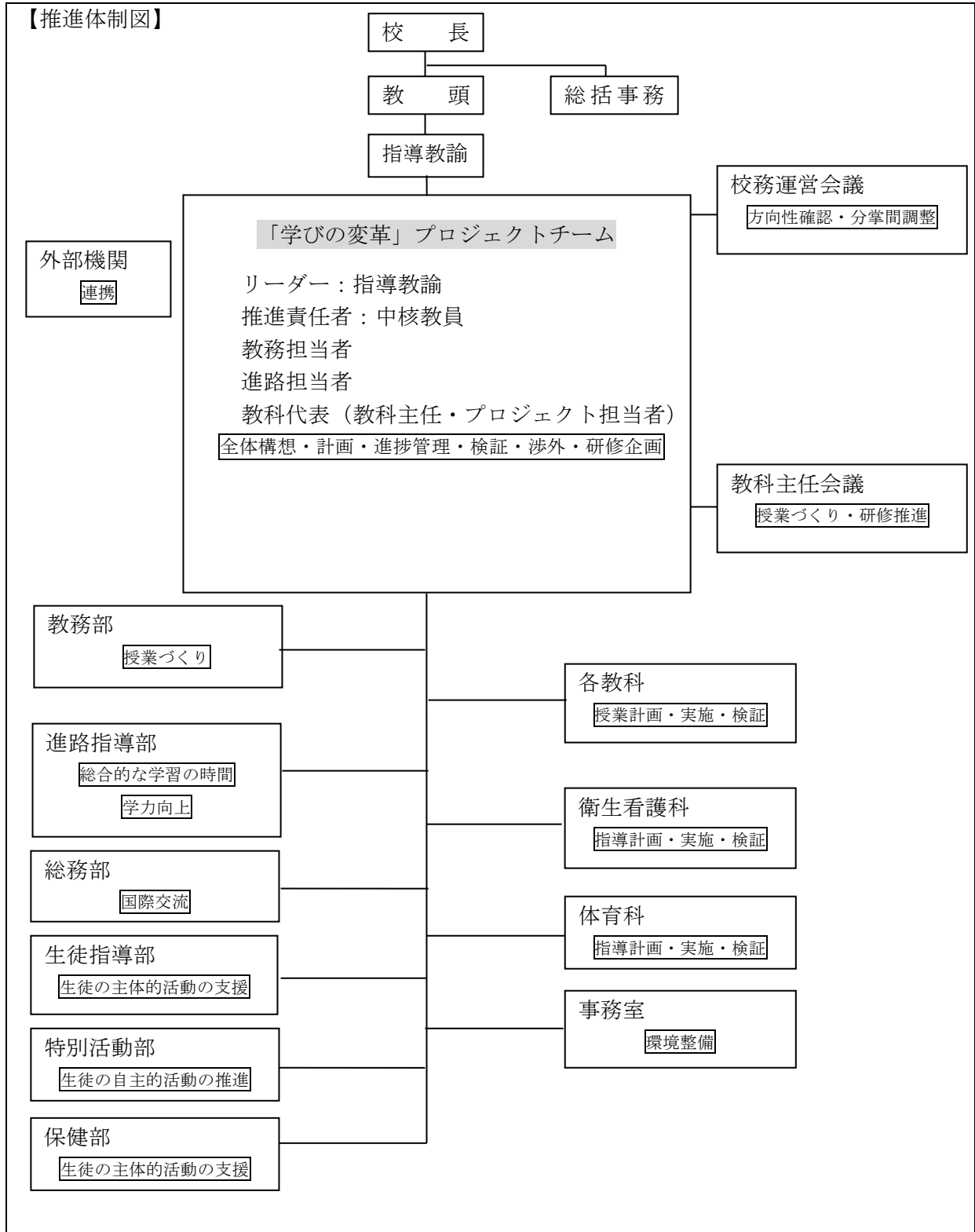
- ①教職員がアクティブラーニングに対する知識が完全に浸透していない
- ②授業目標と手立てがマッチングした授業づくりの実践がまだ不十分
- ③「自ら思考し、自分の考えを根拠を明確にして相手に適切に伝える表現力」の育成が不十分

などが挙げられる。

これらの課題を次年度解決していくために、「皆実コンピテンシー」を明確にし、各授業でどういった力を育成するのかを明確にしていく必要がある。その上で、授業目標を達成するための手立てとしてのアクティブラーニングを取り入れた授業をより一層実践し、生徒の到達度をよりよく把握するために「ルーブリック」などの評価指標を作成していくことが必要である。

次章以降は、各教科における授業実践の取組を述べる。

【推進体制図】



(平成 27年 月 日 限)

簡易学習指導案 (本時分)

指導者 ( )

観察希望時間： 前半部分 後半部分 50分 Full

- 1 教科・科目 ( )
- 2 対象 年 H ( 名)
- 3 生徒に身に付けさせたい力

【学習指導要領との関係】(どの指導事項、指導項目を踏まえているのか。)

生徒に身に付けさせたい力の明確化

力を身に付けた生徒の姿 →広島版「学びの変革」アクション・プラン p 6 (児童生徒に育成すべき資質・能力) 参照

【知識・スキルを身に付け、学習後、具体的に何ができるようになっていけばよいのか】

【意欲・態度・価値観・倫理観のどの側面を目指しているのか】

目指すべきコンピテンシーとの関連性

- 4 生徒の実態(「3 生徒に身に付けさせたい力」の前提となる生徒の状況) ※特になければ省略可

- 5 使用教材

- 6 学習指導上の工夫点(生徒に力を付けるための手立て)

身に付けさせる手立てとしてのアクティブラーニング

- 7 評価計画(個々の生徒に力が付いたかどうかを、いつ、どのように把握するのか)

## 定期試験における思考力問題分析

考查名 ( ) 試験)

教科・科目 ( ) 対象 ( 学年 )

①教科・科目固有の 基本的な能力	与えられた規則，定義，条件，知識等を理解し，それらを正確に運用する力
	事象の在り方や資料の意味・趣旨を，客観的に把握する力
	必要な情報を抽出し，客観的・論理的に分析する力
②教科・科目共通の 思考力・判断力・ 表現力	事象や複数の資料の，関係性について洞察する力
	与えられた知識等を前提に仮説設定や推論を行い，それらを検証する力
	事象を一般化する，具体と抽象の次元を結びつける力
	議論や論証の手順・構造を理解し判断する力
③上の①②を統合す るために必要な力	思考の過程や結論を論理的に表現する力
	与えられた情報・資料や自他の思考を，客観的に批判する力
	他者の立場に立ち，判断する力

【問題要旨】

【模範解答・採点基準】